宗像

毎月十五日発行
発行所
宗像大社
宗像
福岡県宗像郡玄海町
電話玄海代④1311
定価一年送料共1000円

昭和五十年を回顧する

昭和大造営本年をもって終了

昭和五十年は国家にあっては、一すべき年であり、当社にとっては天皇陛下御即位五十年を祝う慶賀、第二宮、第三宮の造営が完了し宿願の大復興事業が全く終了した歓喜の年であった。今、喜歳終掌の刻にあたり、一年を回顧もって来歳の資としたい。

元旦は午後から晴天となり、参拝の人波は境内に溢れ、遠く東北、北海道から参詣した車輌をみて、宏大な御神徳に深い感銘を覚えた。

正月参詣は社頭も賑う一月十日宮中歌会始の儀において三笠宮殿下におかせられては制歌として

沖ノ島森のしげみの岩かげに
千歳ふりにし神祭りのあと

とお詠みあそばされ

久留米の中村孝氏は

宗像の神の祭の氏子船
幡ひるがへし辺つ宮へ漕ぐ

と詠み入選の栄をうけた。因に本年の御題は「まつり」であった。

立春も過ぎた二月十日、「千歳棟、万歳棟」と高らかに唱え、第二宮、第三宮の上棟祭が行われた。鳴弦の音が天地の邪気を祓い、慶祝の瑞気が満ち満ちた一日であった。春の大祭もとどこおりなく終えた四月二十九日、天長の佳節を迎え、天皇陛下御即位五十年祭を厳かに斎行し、聖寿の万歳を賀し奉った。この慶祝の日に続き五月に入るや第二宮・第三宮竣功、十八日より二十二日に亘って遷座大祭が執り行われた。十八日洗清の儀、十九日清祓、御装束神宝読合、川原大祓と前儀は滞りなく終了し、二十日辺津宮神殿が漆黒の闇に包まれた午後八時遷座祭は開始された。浄闇の中を大神輿は悲く新殿に御鎮りになり、翌二十一日の奉祝祭を迎えた。快晴！宮司祝詞奏上、風俗、浦安舞奉納ののち祭典は終了し直会につづいた。宮司の挨拶を始め来賓各位より祝辞を戴いた。中でも出光復興期成会長の語られた「この第二宮・第三宮の御神徳によって永遠の日本」が一層力強く進められ日本が繁栄する、そして世界の為に尽すことを深く感じているわけで御座います」の言葉は参列者の耳朶を打ち、深い感動を喚び起した。

夏越の大祓もおえた八月二十三日、中津宮「照海殿」が竣工した。参籠殿が老朽化したため中津宮前面埋立地に造られた此の建物は奉賛会員・崇敬者の待望久しかったものである。これにより先に完成した沖津宮社務所（三月竣工）と併せて沖中両宮関係の復興事業は終了した。

かくして、沖・中・辺津宮の昭和大造営は全て完成した。その装も新たな当社に、十月二十五日三笠宮殿下・同妃殿下をお迎え申しあげたことは最も極々であった。両殿下は、辺津宮・高宮・第二・第三宮を御参拝のち宝物館を御見学あそばし、引続き、この日建立した殿下御詠歌碑を御覧あそばされた。

また同日、宗像大社復興期成会会長出光佐三氏の退任奉告祭が斎行された。昭和十七年より復興期成会長の重責に就かれた同氏は国民崇の祖神である当社の復興を畢生の念願とせられ戦中戦後の激動期三十余年間の長年月に亘りこの事業に尽瘁され神社史上前例の大復興を果されこの日を迎えられたのである。ここに厚く御礼申し上げると共に益々の御寿を祈ってやまない次第である。

年は将に暮れんとす、来る年が昇龍の如き年であることを念じて止まない。

神具、装束
結婚式場用品
株式会社 井筒
九州店 福岡市吉塚一丁目三番一号（〒八一二）電話福岡（九二）六一五一・九四五六番
本社 京都市下京区油小路六条北入（〒六〇〇）電話京都（〇七五）三五一・三三四・六六六番

遷宮記念大祭斎行

遷宮記念大祭は、十一月一日から二十日まで数々の神賑行事を含めて盛大に執り行われた。

十一日には大祭奇宮祭、十二日に記念大祭が、厳粛裡に斎行された。この期間中は、一日、十五日の月次祭、三日の明治祭、十日から十六日までの七五三祭と諸祭典が相ついで斎行され、氏子崇敬者をはじめ多くの参拝者がひきもきらず敬虔な祈りを神前に捧げた。

一方、境内各所で文化・体育全ての神賑行事が執り行われ、社頭をおおいに賑わすとともに、参拝者を華やいだ気分につつんだ。

西日本菊花大会は一日から二十日まで神前境内において開かれた。本年は熊本・佐賀・佐世保の菊花会も参加し、名実ともに西日本最大の菊花展に成長した。

二日午前九時、本殿脇において奉納剣道大会が剣道連盟宗像支部主催により行なわれた。小学生の豆剣士をはじめ、三百五十名の選手が熱戦を展開した。

三日午前十一時宿衛舎で、清香吟社々中六十名による奉納吟詠大会が行なわれ、終日詩吟・民謡・琴・尺八・三味線・民謡・琴・尺八・三味線・民謡・琴・尺八・三味線

宗像大社宝物館々長
出光泰亮氏の逝去を悼む
＝享年七十九才＝

当社責任役員、宝物館館長出光泰亮氏が去る十月三十日逝去された。ここに深く哀悼の意を表するものである。

氏は明治二十九年四月十四日、福岡県宗像郡宗像町赤間、出光家の五男として生れた。

氏は実兄出光佐三店主が明治四十四年、門司に出光商会を創業されると同時に入店し、佐三店主とともに今日の出光興産の基礎を築いてこられた。門司時代、店主が大八車の先棒を握り、泰亮氏が車の後押しをして油を売り歩かれた苦心談は有名である。

昭和十五年、東京に出光興産株式会社が設立されるや、その監査役に就任、同年六月には取締役名古屋支店長、戦時中は中部地区理事長として石油配給業務に貢献された。戦後は常任監査役から顧問に就任し出光興産の発展に尽された。

氏は佐三店主と同敬神の念厚く、昭和十七年宗像神社復興期成会が結成され、佐三店主が会長に就任されてより、能く店主を補けられ、当社責任役員に就任せられた。

氏は生来非常に温厚な人柄で同亮さん〟と呼んでその人柄を慕っていた。また趣味も広く、殊に力メラの腕前は素人離れしていた。風景や花等の写真はおおらかで美しく、よくその人柄を現していた。また郷土愛の気持も強く、在京宗像郡人会の世話人として、宗像出身の後輩の指導育成にも非常に精力を傾けられた。

最近は宗像大社秋の大祭に参列して、その後小学校時代の同窓会を開かれるのを楽しみにされていた様子である。

本年五月、第二宮、第三宮遷座祭に来社されたのが最後であった。御自分の天寿を悟られ、病臥をおして五万数千点を収蔵する宝物館の建設委員長として浄財の募金にあたられ、宗像原頭に正倉院風の宝物館完成をみたのである。昭和三十九年十一月、宗像大社宝物館館長に、昭和五十年三月より当社責任役員に就任いただい

遷宮記念大祭神賑行事

各大会おおいに賑う

第五回西日本菊花大会開催さる

宗像の秋を飾る菊花展は十一月一日より開催した。大会初日審査会が行われ左記の各賞が決定した

審査会は、県園芸試験場長吉安良入を審査長、同場八川研究室長柏木研究員、小林研究員、吉田専門技術員、九州菊花連盟三藤理事長を審査委員として構えて正かつ厳正な審査が行われた。

作品は、各会員の技術上にともない、いずれも一事が出来ばえで甲乙つけがたく、審査は非常に難航した。また本年より、玄海町成人学級も参加し日頃の精進を披露した。同学級は西日本菊花会高原会長指導のもと二年より菊作りを行っている。

〈大輪の部〉

農林大臣賞　福岡　柴田　六輔
県知事賞　八幡　加藤　忠雄
県議長賞　佐世保　浜田　三郎
飯塚　伊藤　富夫
宗像大社賞　粕屋　中野　真
佐世保　溝口　勇三
県農政部長賞佐世保　大平喜代松
県教育委員会門司　駒山　直次
復興期成会長賞飯塚　安永　秀喜
西日本新聞社賞嘉穂　川崎　正木
菊花会賞　佐賀　築瀬垣天天
福岡　中山　保
熊本　徳永　久光

〈懸崖の部〉

文部大臣賞　若松　川野　盛
県知事賞　門司　佐野　功
県議長賞　若松　島村　一
宗像大社賞　佐世保　志叡　公平
県農政部長賞若松　堀之内稲男
県教育委員会賞飯塚　伊藤　富夫
西日本新聞社賞飯塚　安永　秀喜
菊花会賞　佐世保　北川　俊八
福岡農林事務所長賞　門司　池上　福元
花キ連会長賞若松　川本　幸男
テレビ西日本賞若松　岩崎　祐夫

〈盆栽の部〉

総理大臣賞　遠賀　高島　雪茂
県知事賞　小倉　石本　正義
県議長賞　佐世保　大平喜代松
宗像大社賞　佐世保　井川　晴巳
県農政部長賞佐世保　志叡　公平
県教育委員会賞八幡　吉田　雪岩
復興期成会長賞若松　平野　直義
西日本新聞社賞玄海　吉田　肛
菊花会賞　飯塚　田代　定

福岡農林事務所長賞　佐世保　北川　俊八
花キ連会長賞戸畑　志和　一友
テレビ西日本賞小倉　原田　雪領

〈特作の部〉

県知事賞　粕屋　常岡　勇
県農政部長賞嘉穂　川崎　正木
県教育委員会賞戸畑　野　辰雄
復興期成会長賞八幡　加藤　忠雄
西日本新聞社賞佐賀　橋口　武夫
菊花会賞　福岡　吉田吉之助
商工会議所会頭賞　若松　平野　真義

〈奉納切花の部〉

一位（金）　八幡　広渡　健寿
二位（銀）　飯塚　安永　秀喜
三位（銅）　八幡　加藤　忠雄
四位（天）　佐世保　浜田　三郎
五位（地）　八幡　広渡　邦寿

〈玄海町成人学級作品展〉

町長賞　大輪　大森　敏
盆栽　楠　理
宗像大社賞　桑野　勇
玄海町々会議長賞　占部ツタエ
玄海町教育長賞　高橋　シゲ
菊花会賞　十六人
努力賞

福岡農林事務所長賞　若松　平野　真義
県知事賞　門司　駒山　直次
花キ連長会賞佐賀　松尾　為夫
テレビ西日本賞戸畑　三浦　常男

第四回献詠短歌大会

第四回を迎えた宗像大社献詠短歌大会は去る十一月十一日午前十時から行われた。

この大会は、福岡、北九州、宗像と各ブロックの短歌会を合同し、県内の同好者の交流と、文化昂揚に寄与する目的で発足した。

本年も好天に恵まれ二百名以上の参加者で会場は熱気にあふれていた。

選票は作品とともに、あらかじめ選者と各寄稿者に送付され、各々十首を選び返送されてきたものを集計し、選者選三首、互選七首、入選佳作十首を決定した。

〈選者選〉

知事賞　宗像　鷲津かつ代

廻り道してばかりは聞きあたり
吾子がつとめる場の音

大社賞　宗像　八波　五月

聞き返す事多くなり自ずから話題の外に独り居る我

毎日賞　小倉　時田　房恵

常凡に生きるほかなきわれにして
天まだく虹ながくつており

〈互選〉

第一位（教育委員会賞）　筑紫　藤三田久子

この家よりほかに安らぐところなし
漬物桶に重石沈むる

第二位（毎日賞）　若松友田中四子

揺れつつ入港場に凱旋して橋を塗る
三万屯の船を眼下に

第三位（大社賞）　遠賀　田中秀樹

標識灯またたく夜半の足裏に地下街工事の響き伝わる

第四位（毎日賞）　若松　杉本静乃

幾年の苦労の襞をたたみこみ祖母は小さく米寿の膳に

第五位（同）　田川　立園その

如何なら む罪をおかせし少年がしみじみ詠める母を恋うた

第六位（同）　久留米　馬場喜代次

埋炭の火に老の手を温めつ病伏す妻の髪束ねやる

第七位（同）　福岡　浅田　実

三十八年の勤めの終りて退職の夕べ
みじみ妻の手を取る

入選（作品番敬称略）

八幡　星　雪乃、小倉　松坂すず子、宗像　立石ろせ乃、戸畑　中川みさを、飯塚　塚本不二男、福岡　桜井ツ子、八幡　中山道行

郡内柔道大会

第二回宗像郡内中学校柔道大会が十一月十五日午後一時から本殿横境内に設けた会場で開催された。午前中、夜来の雨が残り、屋外での試合が危ぶまれたが、時がたつに従って天気も回復し主催者を安堵させた。

定刻、選手一同神前に整列し、修祓をうけ、宗像郡柔道協会々長の開会挨拶、審判委員の審判規定の説明を聞き試合開始、郡内五校八十名の選手が日頃精進の技を競い合った。豪快な内股をかければ相手も体を開き寝わざに持ちこもうとする白熱戦が次々に展開され居並ぶ観衆を飽ばせた。また当日は〝七五三まつり〟のせいもあって晴着を装った可愛いい応援団が歓声をあげていた。

午後四時熱戦の末、試合終了、中央中学校チームの上に勝利の栄冠が輝いた。

尚、大会二位以下は次の通りである（リーグ戦）

優勝　中央中学校チーム
二位　玄海中学校Aチーム
三位　福間中学校Aチーム

粕屋　長岡憲子、玄海　村田四郎
小倉　河中靖喜

奉納剣道大会

去る十一月二日、遷宮記念大祭奉納剣道大会が本殿脇境内に於て行なわれた。

今年も郡内各地より小学生の豆剣士を中心として中学生、高校生、一般まで約三百五十名が参加して盛大に行なわれた。

試合は、秋晴の天気のもと午前九時より午後二時すぎまで砂をけたてて続いた。

結果は次の通りである。

小学校低学年の部

優勝　吉田浩二（東部教室）
二位　今駒憲祐（河東教室）
三位　下川晴祐（玄辰館）

小学校高学年の部

優勝　倉元則行（福武館）
二位　今川嘉津（河東教室）
三位　坂本清美（河東教室）

中学生の部

優勝　吉田厳数（城山中）
二位　岩佐康弘（玄海中）
三位　白木　彰（城山中）

高校、大学の部

正助翁二百二十年祭

〝武丸の正助さん〟で宗像郡民になじみの深い孝聖武丸正助翁の二百二十年祭が、去る十一月二十五日午前十時から地元の正助堂で行われた。主催は宗像町と地元区で、中良平三郎町長が遺徳追彩会長となり、郡内町村長、各区長を始め教育関係者が多数参列した。

読経のあと越智　愛大島村教育長の記念講話があり二百名近い参列者に深い感銘をあたえた。

引続き筑前ひわの中村旭園師が〝孝聖武丸正助さん〟を奉納、吉武小学校六年生三十名が「正助さんの歌」を斉唱した。また宗像町村山田、金丸友次郎さんへ病妻に愛情あふれる看護と津屋崎　崎町宮司、久保連さん八施設の老人に愛の奉仕〇の二人に感謝状が贈られた。

〝正助さん〟は寛文十一年（一六七一年）に宗像町大字武丸に生れ、幼少の頃より父母に孝養をつくし、その孝心は、寛政五年（一七九年）幕府がつくった「孝義録」という本に記されるほどであった。中にも病身の父を背おって、その軽さにしみじみと涙したと言う話は、今日でも人の心を打つものがある。

式典終了後、献詠歌会が催され〝正助さん〟を称える歌が詠まれた。

仰木　実

農に生き農に励みし正助の孝は一図の愛にきわまる

高山徳七郎

人の道廃れて憂慮堪えぬ世に光を注ぐ翁の追善

麻生ウメ子

世の中に美しきものは月物を愛する心よ翁の真実

写真　武丸正助の歌を斉唱する吉武小生徒

優勝　尾園田生（東海五高）
二位　鶴林謹二（東海五高）
三位　熊谷敏哉（東海五高）

一般の部

優勝　松葉一徳（宗像署）
二位　馬場田起雄（白の里）

郡内各地で文化祭行われる

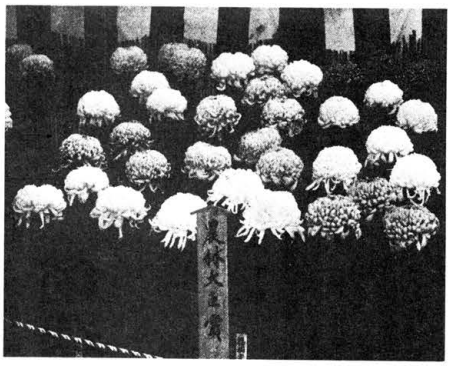
第六回目を迎えた玄海町の文化祭は、本年も宗像大社の宿衛舎を会場に盛大に行なわれました。

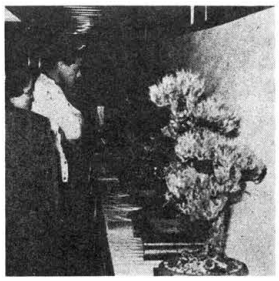
昨年までは一日限りの会期でしたが、住民の要望によって、本年は二日間の会期となりました。十一月十五日（土）十六日（日）の本祭花展の最盛期と重なり、恵まれた天候で終日観覧者で賑わいました。

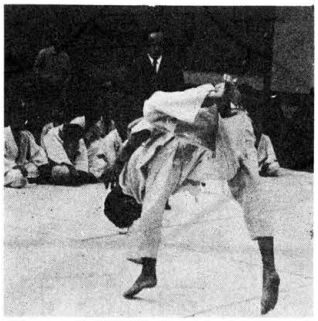
作品も年を追う毎に、手工や技術の向上が伺える今後玄海町の文化の向上に役立つことが約束された様です。

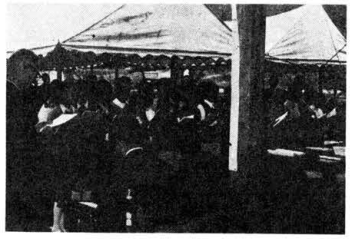
欲を言えば会場が今少し広かったら、との意見もありますが、中央八民館のない玄海町で、内での開催を望む声があったが、会場は二日目の会期となりました。

会場は二度七、五、三の祭と西日祭は、本年も宗像大社の宿衛舎で盛大に行なわれました。









宗像本因坊戦開催さる

遷宮記念大祭の神賑行事として行われている宗像郡囲碁連盟（松尾寛会長）主催の宗像大社本因坊戦は、境内に菊香薫る十一月九日、宿衛舎に於て行われた。この大会の参加資格は、宗像郡内の有段者に限られ、約五十名余の一般選手によるリーグ戦と、これとは別に、自他共にその実力を認められた四、五段クラスの選手十六名により本因坊の栄位が争われるものでこの年で三回目を迎える。

当日参集した約七十名の選手は先ず拝殿でお祓いを受けて棋戦に臨んだ。会場では和気藹藹の中にも日頃鍛えし自慢の腕を発揮せんものと盤上熱戦が展開され、五時過ぎ盛会裡に終了した。

今年は、福間町原町在住の浅見忠雄五段が見事優勝、本因坊の大トロフィーを獲得された。

なお、二位三位は次の両氏である。

二位　有田勇司・三位　山根正男

はどうにも仕方のないものと考えます。会場準備から陳列、運営に努力されました。友交婦人クラブの方々、並に会場を提供していただきました宗像大社に厚く御礼を申しあげますと共に、今後更にこの文化祭の発展を祈念したいものです。

（教育委員会）

◇

宗像郡美術協会（会長桑野恵）宗像郡社会教育振興会主催の「第一回宗像美術郡内展」が宗像町中央公民館で開催された。（十一月二十五日～十二月四日）同会は、昭和四十四年創立以来県文化会館で美術展を開催し、本年第七回展を好評裡に終了した。以前から郡内の開催を望む声があったが、適当な会場が得られず止むを得ず見送っていた。

昨年、幸に宗像町中央公民館が建設されたので、この度の第一回郡内展を開催する運びとなったものである。

会場は一階ホールに洋画、彫像を展示し二階三室に工芸、写真、書道をあて、廊下に日本画を掲げ、出品作品はいずれも日頃の精進を示す力作揃いで参観者を楽しませた。

出品展数は次の通りである。

洋画の部　三十一点
日本画の部　十九点
彫刻の部　二点
工芸の部　十三点
写真の部　十点
書道の部　二十六点

◇おしらせ◇

来年の干支「辰」一刀彫について

当大社恒例の正月授与品である「えと」の一刀彫「辰」が早くも完成し納入された。これは今年の干支を伊勢の名工が精魂に精根こめて彫り上げた逸品で、素朴な内にも威厳と雄雄しさを秘め辰年の招福を手にする人に感じさせる。

特に来年の干支「辰」は十二支の中では実在しない唯一の伝説上の動物である。古来より我国では「タツ」に関する絵画・物語等は数多くあるがその中に出てくるタツの姿は画一されたものでなくそれぞれ異なっている。

この一刀彫は一体一体手彫りのため製作に限度が有り、今年は「五百体」が納品された。当社としてはできるだけ多くの希望者の方々に頒布したいと念っているが何分にも数に制限が有り例年十月三日には授与を尽してしまう状態である。

十二月に入るや早くも来年の一刀彫についての問合せ、予約申込が殺到し係ではその受付におゝわらわである。来年度一刀彫頒布を左記の通り執行います。

一、社頭頒布　元日午前零時
一、場　所　本殿、祈願殿各守札授与所
一、初穂料　一体　弐千円也

宗像大社歌会
俳句作品集（一五五）

田熊　力丸　一郎
柿もぐや白雲一つ竹の先

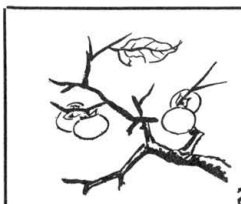
土穴　八尋　恒夫
柿も落ち庭に隣家のあかりさす
給せ着て猫とむきあい日向ぼこ

田島　早鳥
虎落笛聞きつ忝かさねけり

福岡　入江　柳江
虫の宿長男の死を知る夜かな

宗像　岡田　無名
菊を背に七五三の記念撮る

田島　有吉　唐水
歳末や妻の買物重きこと
年の瀬や街行く人の足早や
吾れも亦師走の空の人であり



西日本新聞社刊・滝口凡夫著

創造と可能への挑戦
―出光佐三の事業理念―

第四章　地は肥えたり　(五)

創業十年

十年は財界の一転機にして、播種に始まり収穫に終わる。出光商会の創業たるや、日露戦争後の財界大悲況時にして、そのご世界大戦中の希有の活躍期を過ぎて今日にいたる。財界の一転機と創業十力年とが一致すること、また偶然といっべし。

吾人は過去において、絶好の天候に浴して確実なる収穫を得るといえども、その収穫たるや突飛的破天荒ならざりき。隠忍苦闘の結果であり、粒々漸進の賜（たまもの）である。したがって、天候の悪化とともに、貯蔵すべき設備なく、収穫物を風雨に曝（さら）し腐敗の惨状を免れたり。

漸進的なし吾人の地は肥えたり、種子は富めり、経験は積みたり。吾人は将来たいし、一大暗示を得たるものと言わざるべからず。吾人は来たるべき収穫を目的として、大に播かざるべからず、働かざるべからず。しかも、播種は遠き獲物を目的として近き――楽しみなし。倦（う）むべからず。

過去十力年の練磨は、現下の思想動揺、風儀の廃頽（はいたい）に対して、いかなる対圧力を示すや。いまや吾人は、試練の台上に立てるものと言わざるべからず。この好記念日に際し、惑わず、萎縮せざる大自信力の発現を望むものなり。

（注、白駒過隙＝白い馬が壁のすき間を走り過ぎる、つまり月日のたつのが早いことをたとえたことば）

これからさらに十年。昭和六年に創業二十周年を迎えるまで、先に述べた第一銀行の融資引き揚げ、恐慌と長期不況、石油業界の乱売合戦といった試練にさらされながら朝鮮、台湾に進出し、東京、名古屋などに支店、出張所を設けている。営業規模は拡大する一方であった。

二十周年のときは、海外を含め支店六、出張所八、従業員約百五十人に達した。

営業規模が拡大し、従業員がふえた場合、もっとも警戒しなければならないのは、出光の理念、方針が従業員に徹底しにくくなることである。佐三もこれを恐れた。

二十周年の年に開いた第九回主任会議では、こう強調している。

『年々、店員の増加とともに、団結の力はだいに弱くなることを覚悟せねばならぬ。これにたいし、吾人はいかなる態度をとるか。すなわち、こんごの店員指導はいかにするや。

ただ

一、店員にたいし、徹底的の親切なる心を有すること

一、身をもって範を示すことに尽きるのであります』

なまはんかな親切はするな、それは相手にとってかえって不親切な結果となる。指導は「徳」をもってせよ、上のものほど忙しいのは当然だ、身をもって範を示せ――と繰り返し訴えている。

佐三は昭和七年、門司商工会議所会頭に推された。四十七歳であった。

昭和五年、北九州の八幡で出版された『北九州の人物』という和とじの本がある。当時の佐三が、地元でどうみられていたかをうかがう、ひとつの資料である。

『門司の新進実業家・出光佐三君』という見出しで、つぎのように紹介している。

『頭脳明敏、すこぶる商機に長じ、その現代的経営方法あいまって、前途ますます有望の実業家たるを想像せしめ、陰然門司実業界に重きをいたしておるも、多忙のため公務に厭くを欲せず、ようやく商工会議所議員たるのみであるが、しかも、その識見、その手腕、かつ年齢に富むにおいて、君が将来はすこぶる期待すべきもの多々あるといってよい』

佐三はもともと政治きらいである。『会頭に当選しても断わる』とすいぶん逃げたが、副会頭を四力月したあと会頭にまつりあげられた。『会議所の仕事は政治ではない』と自分に言いきかせながらの就任だったが、とうとう十五年まで約八年間務めた。

この間、門司港の整備計画、関門架橋、海底鉄道トンネル、下関を含めた関門、北九州六市合併の運動などに尽力している。

関門鉄道トンネルは太平洋戦争中の十七年、国道トンネルは三十三年に開通した。また、北九州五市合併は三十力年に実現し、関門架橋は四十八年秋に完成する。

貴族院の多額納税議員に当選したのは、会議所会頭を務めていたときの十二年である。終戦後の二十二年まで在職している。

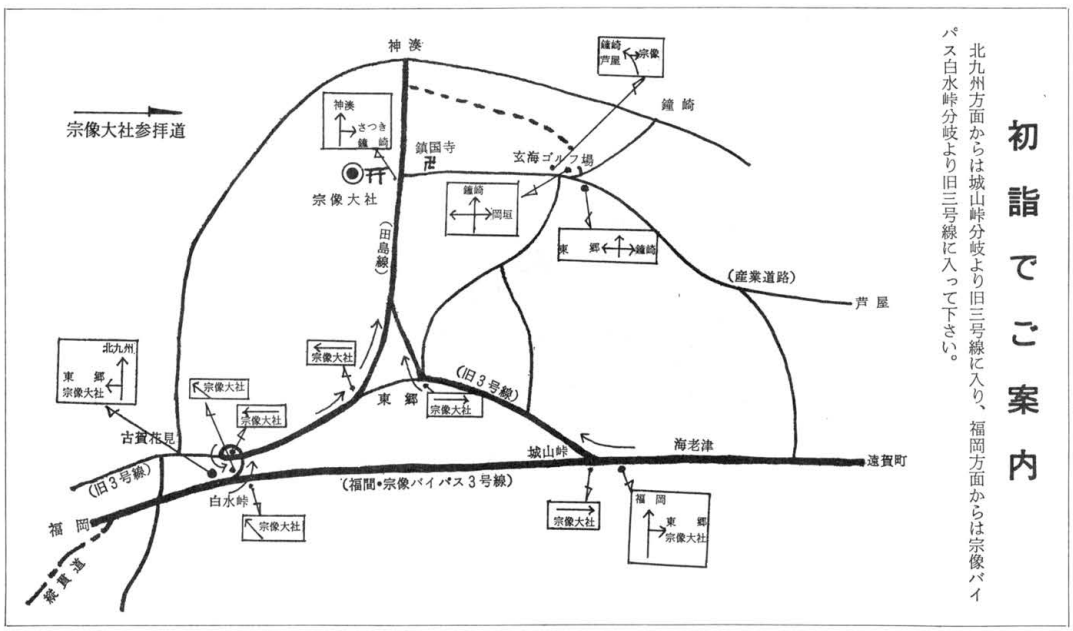
〔編集部注〕

第五章『組織・機構との戦い』は、出光が大陸・南方地域にまで販路を広げ、人間の真に働く力を顕現した足どりをたどったものですが、紙面の都合から著者の了承を得て割愛させていただきます。

次回は第六章『廃墟の中から』に入ります。

初詣でご案内

北九州方面からは城山峠分岐より旧三号線に入り、福岡方面からは宗像バイパス白水峠分岐より旧三号線に入って下さい。



十二月社務日誌

十一月十三日
東海幼稚園一八九名、七五三祭
玉名菊花会二十名参拝
防火管理者資格取得講習会、於県消防学校、宇都宮祢宜、本多権祢宜参講

十一月十四日
玄海幼稚園二二〇名、七五三祭
出光福岡支店研修員六名参拝
RKBラジオ、当社七五三祭実況放送

十一月十五日
月次祭
寡納案道大会、於本殿廻廊内
植木盆栽交換市、於境内（十六日まで）
玄海町文化祭、於宿衛舎（十六日まで）

十一月十七日
白山神社敬神婦人会百七十名参拝
長崎県立美術博物館、沖ノ島神宝撤収、松本権祢宜出向

十一月二十日
古賀町花見老人クラブ四十名参拝
長崎県立美術博物館より神宝返納、若浦館長外二名来社

十一月二十一日
長崎屋全国所長二十名参拝

十一月二十二日
佐世保菊花搬出
燈台船「げんうん」との親善ソフトボール大会、於玄海小学校、試合後月寮にて直会

十一月二十三日
新嘗祭
出光興産㈱石田社長並に地元総代参列
宗像青年会議所、日本青年会議所加盟認承証伝達式、於第三駐車場

十一月二十五日
武丸正助翁二百二十年祭記念式典、久保名誉会員、楠本祢宜出席
名古屋市植田八幡社加藤宮司外二十三名参拝

十一月二十六日
小郡市三井高校母の会二十名参拝
福岡市笹丘二丁目婦人会三十名参拝

十一月三十日
衆議院議員山崎拓氏民連政報告会、午後七時、於清閑殿

十二月一日
月次祭
香川県教育文化財保護協会、琴陵光重氏代表者来社

十二月三日
ルイス・ブッシュ氏外二名参拝

〔年中行事〕
十二月の主な行事

一年のしめくくりの月であり、年間を通じて最も日中の短い月である。日本海側や北日本ではすでに降雪もあろう。

この月の別名として「極月」はまずわかるとして師走の呼称が通例になっているのは、やはり一般に師匠までも走り出す月、という人間味をともなった語感のせいであろうか。

年の最後の月として、各地でいろいろな行事や祭祀があるが、大体が納めや供養である。

年市（としのいち）

歳の暮に、新年に用いる飾物・器具等を商う市。神社・祠堂等多くの人の群集するところに立つ。江戸では、浅草観音・深川八幡・神田明神・芝神明・芝愛宕権現・麹町平河天神を六大市と称し、最も有名で、そのほか湯島天神の年市等もあった。注連飾・海老・福俵・羽子板・破魔弓・桶類・樽類・箒・飲食物その他雑貨を商う。浅草の年市は最も古いもので、その規模も大きく江戸第一の市と称されている。

春日若宮祭

奈良の春日神社の摂社若宮神社の祭礼。保延年間（一二三五～四〇）に始まったので、保延祭とも称し、霜月に行われたので霜月祭（しもつきまつり）ともいい、その荘重盛大なことから単に御祭ともいった。崇徳天皇の時創始が続き、疫病も起ったので、関白藤原忠通が五穀豊饒、疫病防遏（ほうあつ）を祈ろうとして、保延二年に祭を行ったのが初めで、以来勅祭、或は国祭として行われた。現在でもなお相当盛んに請願主から懸物が献ぜられている。祭日は、寛正年間（一四六〇～五）から毎年十一月二十七日であったが、明治十一年から十二月十七日に改められた。

大祓（おおはらい）

古くは「おおはらえ」といい、近世以来「おおはらい」といわれるようになった。毎年六月と十二月の晦日に、天皇をはじめ、百官男女・天下万民が知らず知らずの間に犯した一切の罪・穢れを除き去るために、皇城の朱雀門や各地の神社で行った神事をいう。六月の大祓は「なつはらえ」「なごしのはらえ」という。

煤払（すすはらい）

年中行事の一。十二月中の吉日を選び、屋内を掃除することをいう。煤を払うことは古くから行われたが、年中行事となったのはいつころか明らかでない。

追儺（ついな）

「おにやらい」ともいい、疫鬼を追い払う意味で、毎年十二月晦日夜に行われる朝廷の年中行事。諸国の神社でも古くから、鬼やらいの神事として行われ、現に追儺祭の名のある神社が各地にあるが、その祭日を異にし、節分祭と同時に行う神社も多い。

除夜（じょや）

十二月の晦日（みそか）をいい、除歳・除夕・大歳・年越などともいう。年の暮は、古くから、上下の別なくたがいに往来して礼物を贈答してこれを祝い、また餅搗・煤払などがあって、他の月にくらべて特に多事であるが、これは旧い年を送って、新年を迎える準備であり、なかでも除夜は一年の最終であるため、一夜のうちに、特に多くのことが行われた。

この十二月の晦日のほかに、正月六日・同十四日を「六日どし」「十四日どし」ともいう。

十二月晦日には、江戸時代以来の風習で、商人は金銭の出納の結果をつけ、また、「日本歳時記」によると、「つくしみて心をしづかにし、礼服を著、酒食を先祖の霊前にそなへ、みづからも酒食を食し、家人奴婢にもあたへ、一とせを事なくてぬる事を互に歓娯し、坐して以て旦をまち、旧を送り新を迎へべし」と記されている。また「俳諧歳時記」には「本邦の俗、この日つぐみ鳥を焼て食ふ、是継身（つぐみ）の訓により て賀する也、又貧をとる家、かしは鳥を食ふ、是借取の祝語なり、今は大かたこの戯なし」とあり、「浪花の風」には「節分大晦日には、必らず麦飯を焚て、赤いわしを添へて祝い食ふ、年越には麦飯を食ふこと貧富相同し、江戸にて蕎麦切を用ふるが如し」とあって、大阪では麦飯、江戸では蕎麦を食って除夜を祝う。

当社の祭事

月次祭　一日・十五日
古式祭・鎮火祭　十五日
大祓式　三十一日
古式祭、その年の新穀で作った飯、酒を神前にお供えし五穀豊饒を感謝し、神と共に畝く祭りで、民間伝承の当社唯一の祭で「お座」と言われています。「お座」には新筵（にいむしろ）が敷かれ、忌穂（いみほ）の刺し立てられた御飯を栗の穂でいただき、無事息災の神恩に感謝します。古式祭は郡民のあつい信仰にささえられて約八百年続いており、我が国でも一番古い祭です。昔から普通の神饌のほかに九年母（くねんぼ）みかんの一種・菱餅のお菓子、更に江口の浜からあげられる海草「ゲバサモ」が特殊な神饌として竹籠に盛られてお供えされます。

大祓式　我が国の古い習慣として、一年を二期に分けて生活していました。それは陰暦の六月晦日と十二月の大晦日であります。

この時知らず知らずに犯した罪や穢（けがれ）を祓って、あとの半年を清らかな心と身体でつつんで生きるための行事が大祓式であります。神社神道の特質は一言で言えば「祓（はらえ）に尽きるといえます。そしてこの祓い清めることを重ねて「清く明るく仲よく」暮すことが日本人古来のあり方といえよう。

たやすいことのようでも「さやけく生きることほど難しいことはありません。反省と明日への備えのために「祓い」を重ねて清々しい新年を迎えましょう。